

二〇一八年十月 地方公演 配役表

昼の部

解説 (あらすじを中心に)

義経千本桜

椎の木の段

口	豊竹 巨太夫	権太侍 善太	吉田 箕之
奥	鶴澤 清 丈	権太女房 小仙	桐竹 亀次
後	豊竹 呂勢太夫	主馬 小金吾 武里	吉田 箕紫郎
すしやの段	鶴澤 清 治	六代 君	吉田 文次郎
前	豊竹 呂太夫	若葉の内侍	桐竹 勘次郎
後	鶴澤 清 介	いがみの権太	吉田 勘彌
後	竹本 津駒太夫	娘 お里	桐竹 勘十郎
	鶴澤 藤 蔵	弥左衛門 女房	豊松 清十郎
		平 維 助 兼 盛	吉田 竹 勘 壽
		すしや 弥左衛門	吉田 玉 志
		梶原平三景時	吉田 幸助 改め 玉 輝
		すし 買	吉田 玉 助
		村の役人	大 ぜ い
		軍 兵	大 ぜ い

望月太明藏社中

解説 (あらすじを中心に)

義経千本桜

道行初音旅

静御前	豊竹 呂勢太夫	静 御 前	桐竹 勘十郎
狐忠信	豊竹 希太夫	狐 忠 信	吉田 幸助 改め 玉 助
ツレ	鶴澤 清 志郎		
豊	鶴澤 清 丈		
鶴澤 清 丈			
鶴澤 友之助			

豊竹 巨太夫

新版歌祭文

野崎村の段

中	豊竹 希太夫	娘 おみつ	豊松 清十郎
後	竹本 三輪太夫	手代 小助	吉田 箕一郎
前	竹澤 團 吾	丁稚 久松	吉田 清五郎
後	竹本 文字久太夫	親 久作	吉田 文 司
ツレ	竹澤 友之助	下女 およし	吉田 箕太郎
		娘 お 染	吉田 彌 彦
		駕 籠 屋	吉田 勘 介
		駕 籠 屋	吉田 勘 介
		母 お 勝 頭	桐竹 勘 壽
		船 頭	桐竹 紋 秀

望月太明藏社中

義経千本桜 椎の木の段・すしやの段

源義経によって平家は滅亡。しかし、平重盛の嫡子維盛は生きていて高野山に入ったとの噂。都の近くに身を潜めていた維盛の妻若葉の内侍と若君を連れ、主馬 小金吾 武里が高野へと向かいますが、途中、吉野の下市村で、親からも勘当された悪者、いがみの権太に金をゆすり取られた上、追手にあい、討死。

実は、維盛は、かつて重盛に恩を受けた弥左衛門、つまり権太の父の店で、奉公人の弥助として匿われていました。事情を知らない妹お里は、父が熊野浦から連れて来た弥助に首つたけ、今夜の祝言が楽しみでなりません。けれども、内侍が宿を求めて訪れ、真実が明らかに。一生連れ添うつもりでいた夫を失ったお里の慟哭…。

そこへ、弥助の正体を見抜いた源頼朝の家臣梶原景時が。妹の逃がした維盛夫婦を追い、戻って来た権太が差し出したのは、縄をかけた内侍と若君、そして、維盛の首。手柄をほめ、梶原が去るや、怒って権太を刺す父。が、内侍、若君と見えたのは、権太の妻子、首は、弥左衛門が偶然遺体を見つけ、維盛の身代わりにとひそかに持ち帰っていた小金吾の首。権太は、たまたま弥助の正体を知って心を改め、愛しい妻子を身代わりにして、維盛一家を助けたのでした。

ところが、昔、重盛に命を救われた頼朝の本心は、維盛を助け、出家させることだったと判明。妻子を犠牲にする必要などなかった…。権太は、今の死に様も悪の報いだと悟り、これまでの悪事を悔いて絶命。維盛は誓を切り、家族と別れ、高野へ。

人形浄瑠璃の全盛期、延享四年(1747)、竹本座初演。竹田出雲(二代)、三好松洛、並木千柳による五段続きの時代物で、『菅原伝授手習鑑』『仮名手本忠臣蔵』とともに浄瑠璃三大傑作に数えられています。

昼の部でご覧いただくのは、全篇の山場となる三段目。『平家物語』に見られる維盛の物語―源平の合戦の最中、戦場を離れ、都に残した妻子を恋い慕いつつ、高野で出家し、那智の沖で入水―を踏まえ、「すしや」では、現在も奈良県吉野郡下市町で営業されている「つるべすし 弥助」を舞台としています。

義経千本桜 道行初音旅

大和の源九郎狐の言い伝えを取り入れた四段目の華麗な道行。道行の最高傑作といわれ、聞きどころ、見どころ、たっぷりです。

平家を滅ぼしたのち、謀反を疑われ、頼朝に追われる義経は、吉野山に潜伏。それを知った愛妾静御前が、義経の家来佐藤忠信を供とし、吉野をめざして大和路を旅します。満開の桜の中、義経を思つて静が打つ鼓「初音」は、大昔、雨乞いのために雌雄の狐の革で作られ、義経が法皇から賜わり、静に形見として与えたもの。実は、この忠信は鼓の子、つまり狐…。狐独特の表現や早替わりもお楽しみください。

新版歌祭文 野崎村の段

大店の娘お染と丁稚久松の、許されない主従の恋。しかも、お染には結婚が決まり、久松には、養い親久作の妻の連れ子、おみつという許婚がいました。この恋の行く末を心配し、また孝行なおみつの幸せを願う久作は、店で失敗した久松が実家に戻されたのを幸い、おみつと祝言をあげさせることに。待ちに待った祝言が突然決まり、おみつは大喜び。ところが、久松を追つてお染が…。

あくまでも恋を貫こうとするお染。その強い思いに打たれ、一度は恋を諦めた久松も、一緒になれなければ死ぬとの意を再び固めます。久作は、道ならぬ恋を思い切るよう説得。涙ながらに別れを約束する二人。しかし、おみつは、心中の覚悟を見抜き、二人を添わせるため、自身の幸せを諦めて尼に…。

安永九年(1780)、竹本座初演。お染・久松の心中(1710)を題材とし、新たな悲恋を盛り込んだ、近松半二の上下二巻の世話物で、上の巻の「野崎村」は文楽の代表的な演目のひとつ。お染の美しいクドキや、お染と久松が船と駕籠とに別れて野崎村(大阪府大東市)から大坂へと去っていく段切の、華やかで躍動的な三味線は、大変有名です。

◎字華表記がございます。席によっては字幕が見にくい場合がございますので、あらかじめご了承ください。
◎出演者の急病やその他やむを得ない事情により、代役もしくは演目を変更して上演する場合がございます。
◎開演中の写真撮影、録音録音ならびに携帯電話、スマートフォン等の使用は固くお断りいたします。